

●二人で味わう古典和歌(58)

## 石川や浜の真砂は尽くるとも世に盗人の種は尽きまじ

石川五右衛門

安土桃山時代の盗賊の首長であったと言われる石川五右衛門の素性はよくわかっていない。集団で京大阪を荒らし回り、豊臣秀吉の命を狙ったという伝説を残したが、最期はついに捕えられ、京都三条河原で油釜ゆでの刑に処せられたという。この凄惨なエピソードが一躍有名になり、のちの「五右衛門風呂」の由来にもなる。

「わが名石川の浜の真砂もいつかは尽きるとしても、私の跡を襲う盗人の種は将来にわたって永遠に尽きることにはあるまい」。この歌は、処刑から約九十年後の貞享年間に松本治大夫による浄瑠璃『石川五右衛門』に五右衛門の辞世の作として披露され、その後いくつかの浄瑠璃に踏襲されてゆくこととなる。なかでも並木五瓶の歌舞伎「金門五三桐」の南禅寺山門の場での秀吉との唱和でいっそう知られることになった。



『古事記』の神遊び歌「君が代は限りもあらし長浜の真砂の数はよみつくすとも」や、『拾遺集』の清原元輔の歌「万世を数へむ物は紀の国の千ひろの浜の真砂なりけり」など、「浜の真砂」は数えきれないことの象徴としてこれまでも使われてきた。掲出歌でもそのイメージを引用したものだと思われるが、どうやら五右衛門の教養範囲からすると出来過ぎた作であるとのこと。研究者の間では、前述の脚本家たちの創作というのが定説となっているようだ。「たとえ自分が死んだとてこの世から泥棒が消えることはない」という言葉は、高齢者を狙う詐欺の横行する令和の世においてもなお深い説得力を持つ。天下の大泥棒は権力に反抗して盗みを働く庶民のカリスマであったとも。真偽のほどはわからないけれど、親族全員が刑に処されていることや、油釜ゆでという想像を絶する極刑を思うとき、一族もろとも根絶やしにせねば、という時代の権力者の怖れを感じずにはいられない。謎に包まれた石川五右衛門という人は、四百年以上経った今でも私たちの心を不気味に惹きつけ続けている。

(小島なお)